

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650584

研究課題名(和文)生物による地域文化資源形成への地理学的貢献

研究課題名(英文)A geographical study of local subsistence and cultural adaptation to the environment by analysis of micro-nutrition

研究代表者

野中 健一 (NONAKA, Kenichi)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：20241284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生物資源の生活文化的価値付けによる地域文化資源の創出に地理学が寄与するとともに、地理学が現実社会への応用や新たな取り組みへの積極的支援できること、理論的バックボーンとして役立つ枠組みを構築することを目的とした。

生物を生かした地域資源の活用実践を対象として、地理学の間人-環境論の視点、地域を自然・文化・社会・経済の統合的にとらえ分析する方法論を構築し、生物の文化的特質と地域生活環境との融合を図る実践的研究を実施した。1. 生息環境の保全、2.文化資源の形成、3.文化価値の普及、の3点を柱に、文献研究ならびに事例研究を実施し、それらを統合して実践地理学の体系化を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was construct a framework to act as a theoretical backbone, through which geography could be applied to the real world through contributing to the creation of local cultural resources by giving a living cultural value to biological resources.

In this study I focused on the way in which living things were utilized as local resources from the perspective of human geographical environmental theory. I offered a methodological framework that integrates social, economic, cultural and biological factors, enabling applied research that connects the cultural characteristics of living things with the local environment. I focused on three products of the utilization of living things as local resources: 1.The preservation of the surrounding environment; 2.The generation of cultural resources; 3. The diffusion of cultural values; and by integrating case study data with a literature review, I aimed to present a systemization of practical geography.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：地域文化資源 野生生物 在来家畜 口之島牛 アグー クロスズメバチ 地理学

1. 研究開始当初の背景

各地で伝統的にあるいは地域に存在するさまざまな生物を新たに地域資源として活用して地域振興を図ろうという動きが盛んになっている。そこでは、生物の特質や環境への影響、利用する文化的価値、生活の中で負荷や利益、普及可能性などが総合的に勘案されることが必要である。地理学は地域の環境や生活を総合的に分析する視角を有しており、地域資源を生かすことに積極的に与ることが可能であろう。

本研究はこのような価値をもつものを地域文化資源と定義する。地域文化資源化について企画、形成、普及の段階において、地理学の方法を活かした取り組みを、地理学者が積極的に担うことにより、地理学が実社会に役立つ学問であることを発信する。

地域文化資源作りにおいて計画、試行段階から実現に向けて、そこに地理学的な発想や視点が活かされることよって、地理学が現実社会や地域作りにおいて貢献することを具体的に示すことが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、生物を生かした地域文化資源の活用実践を対象として、地理学の人間 - 環境論の視点、地域を自然・文化・社会・経済から統合的にとらえ分析する方法論を提供し、生物の文化的特質と地域生活環境との融合を図る実践的研究を行う。

生物資源の生活文化的価値付けによる地域文化資源の創出に、地理学が寄与するとともに、地理学が現実社会へ応用され新たな取り組みに積極的に支援を行うことを示し、理論的バックボーンとして役立つ枠組みを構築することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、生物を生かした地域文化資源化を、(1)生息環境の保全、(2)文化資

源の形成、(3)文化価値の普及、の3点を軸として、文献研究ならびに事例研究を実施し、それらを統合して実践地理学の体系化をめざす。

具体的な事例研究として、日本の伝統的生物資源利用の一つであるクロスズメバチを中心とするハチ飼育に関する地域文化資源化および在来家畜のアグー豚および口之島牛の地域文化資源化の実践を取り上げる。

関連する国内外の文献のレビュー、事例研究においては現地での資料収集、聞き取り、観察、資料の計測分析等を実施する。そして、国内外の関連研究者との討議を踏まえて枠組みを構築する。

4. 研究成果

(1)ハチ飼育の地域文化資源化

クロスズメバチ飼育に関する地域文化資源化についてその飼育実態および地域文化活動を調べるとともに、ネオニコチノイド系農薬の被害認識と実態とを調べた。

クロスズメバチ食および飼育を担う人々の高齢化が進み、1990年代に中部地方30箇所以上でできた各地のクロスズメバチ愛好会組織が弱体化しており、今後の存続と活性化が模索されている。そのいっぽうで若い世代に飼育文化継承の機運も生まれており、あらたな発想としてクロスズメバチ中心から「山の文化」地域資源の一つとして他の生物利用や食文化とあわせた総合的な地域資源として扱う方向が生まれてきた。これに関して申請者は、これらの会議への参加やセミナー開催を通じてクロスズメバチ食の国内外の事例をもとに比較文化的な提示を愛好者や同好会組織で行い、昆虫食文化や山村生活の展示作業を実施した。さらに地域郷土資料館の修復作業にも構想段階から関わり、地域生物資源との関わり合いの発信を始めた。

ネオニコチノイド系農薬の影響については、近年被害が指摘されるようになった。ク

ロスズメバチは初夏から営巣を始め、秋に新女王の誕生までのライフサイクルをもつ。その中で、人々がもっとも利用する 11 月の食用時期の幼虫・蛹からは残留農薬は確認されなかったが、8月の農薬散布時期にはハタラクバチの多数の死亡が指摘され、農薬害が認識されている。クロスズメバチを飼育する際には、初夏に採集して自宅で巣箱を用いて飼育するので、水田と巣箱の位置が近くその影響を受けることが考えられる。

(2)在来家畜の文化資源化

在来家畜の保存は生育させることに意味があるとした上で、アグー豚・口之島牛を経済動物として存続させるための家畜としての価値付けと保全のための生活展示の可能性の研究を行った。肉として製品化するにあたって、文化を生かした製品化と地域産業化を検討した。在来家畜が地域の生活と結びついていることで存続してきたことを明らかにした上で、動物園における飼育と地域文化との組み合わせ（アグー豚）、残存個体の確保と飼育環境整備および生活文化との関連づけ（口之島牛）を実施した。

この事例をさらに実践的に進めていくために、在来豚を復活させ地域産業化させた成功事例としてフランス・バスク地方のバスク豚の事例を実地調査した。地域アイデンティティとしての存在、地域の環境と資源を生かした飼育、農家の農業畜産経営への組み込み、付加価値を付けた製品化について知見を得た。

また、パリ農業博覧会での在来家畜展示を調べ、フランスの各地の在来家畜への関心の高さと維持努力が明らかになった。日本においても市民レベルでの家畜・農業生産への関心を高めることで、在来家畜の価値を高め、保全・活用の社会環境が整えられる示唆が得られた。

(3)総括

本研究で取り上げた具体的な事例研究とアジア、オセアニア、アフリカ、ヨーロッパでの生物利用研究・ライフヒストリー・日常生活研究との比較を通じて、いずれにおいても在来生物資源が生存・生活において大切なものであり、獲得・食用・愛玩などの利用に関わる知識が社会・生活環境・モビリティの構築に重要な役割を果たしていることが明らかとなった。本研究全体を通じて、生物を利用する諸活動を地域生活・文化と関連させてとらえることが、地域作り・地域文化の再発見やそれに基づいた新たな発想を促すことにつながり、地理学的な地域の諸事象と結びつける方法を用いて、価値の提案を積極的に進めることが可能となることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 12 件)

坂本昇・角正美雪・野中健一「昆虫食をテーマとした展覧会 伊丹市昆虫館企画展「昆虫食～ごはんやでえ」開催報告」伊丹市昆虫館研究報告2、2014、27-40（査読無）

野中健一「昆虫食と食用昆虫-新たな食物資源としての可能性-」食品と科学 55、2013、14-21（査読無）

野中健一・牧野義則「木を「生かす」・森に「生きる」-岐阜県付知町における林業と地理学の協働による山村生活への付加価値作り-」地域イノベーション5、2013、43-56（査読有）

野中健一「村人と調査者との共感形成による在地の知識の再認識-ラオス、ドンクワイ村の事例-」E-journal Geo8-1、2013、34-47（査読有）

野中健一「地理学者の地理学 岩田修二

の地理学的思考の原風景」立教大学観光学部紀要 14、2012、99-120 (査読無)

坂本昇・野中健一・柳原望・シビライ・センドゥアン、ヤーナターン・イサラー、岡本耕平「研究成果の現地還元としての展示制作-ラオス、ドンクワイ・ヴィエンチャン平野の暮らし博物館の事例」博物館学雑誌 38-1、2012、45-58 (査読有)

野中健一「アジアの昆虫食 -稲作との結びつきから-」自然と文化 3、2012、2-5 (査読無)

野中健一「人の自然のつながりを昆虫食から探る」本の花束 341、2012、3 (査読無)

野中健一「虫を食べることから健康へ-自然の恵みをおいしくいただく」鍼灸 28-1、2012、71-75 (査読無)

Nonaka K. Food-use of insects in livelihood and its regional distribution in Japan *Promotion of underutilized food resources for food security in Asia and the Pacific Proceedings*, 2012、63-70 (査読無)

野中健一「地域社会から発信する昆虫食」ピオストーリー15、2011、39-41 (査読無)

野中健一「イナゴを食べますか?-超域文化概論-」なじま 1、2011、18 (査読無)

〔学会発表〕(計 11 件)

野中健一「人類史における養蜂への地理学的視点」日本地理学会春季学術大会、2014 年 3 月 28 日 (東京)

上村早江子・梶原英彦・野中健一「名古屋市内における都市養蜂を生かしたまちづくりへの高校生の貢献」日本地理学会春季学術大会、2014 年 3 月 28 日 (東京)

野中健一「自然に生きる-昆虫食と野生資源利用からみる東南アジアの暮らし」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会秋季研究大会ならびに講演会 2013 年 10 月 16 日 (横浜)

野中健一「世界の昆虫と昆虫食」信州昆虫

館講演会、2013 年 9 月 22 日 (長野)

野中健一「虫はごちそう!？」浦安おはなしの会 2012 年 10 月 27 日 (浦安)

Nonaka, K., Food-use of insects in livelihood and its regional distribution in Japan. Promotion of underutilized food resources for food security in Asia and the Pacific. 2012 年 5 月 31 日 (タイ・コンケン)

Nonaka, K., Insect Foods in Japan ラジブガンジー大学講演会、2012 年 2 月 27 日 (インド・インタナガル)

Nonaka, K., Living on Insects. Assessing the potential of insects as food and feed in assuring food security, FAO、2012 年 1 月 23 日 (イタリア・ローマ)

Nonaka, K., Insect food and sustainable use of environmental diversity. 国際地理学会議、2011 年 11 月 15 日 (チリ・サンチアゴ)

野中健一・栗田和明・丸山浩明「大学院学生のためのフィールドワークの安心安全支援」日本地理学会秋季学術大会、2011 年 9 月 25 日 (大分)

野中健一・西村春菜「犬の話題の言語リハビリへの活用」ヒトと動物の関係学会学術大会、2011 年 6 月 26 日 (東京)

〔図書〕(計 2 件)

宮本真二・野中健一「はじめに」野中健一・宮本真二「人はいかにして住まうか」野中健一「砂漠に住まう-カラハリ狩猟採集民の居住地選択と決定」宮本真二・野中健一編 他 14 名『自然と人間の環境史』海青社、2014、396 頁 (2-5、13-28、99-116)

西村春菜・野中健一「イヌの飼育が作り出す社会空間のとらえ方とその活用」池谷和信編他 14 名『生き物文化の地理学』海青社、2013、374 頁 (277-300)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

野中 健一（NONAKA, Kenichi）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：20241284